

かずさの博物誌

オオイトンボと モノサシトンボ

～トルコ石のようなブルーのトンボ～

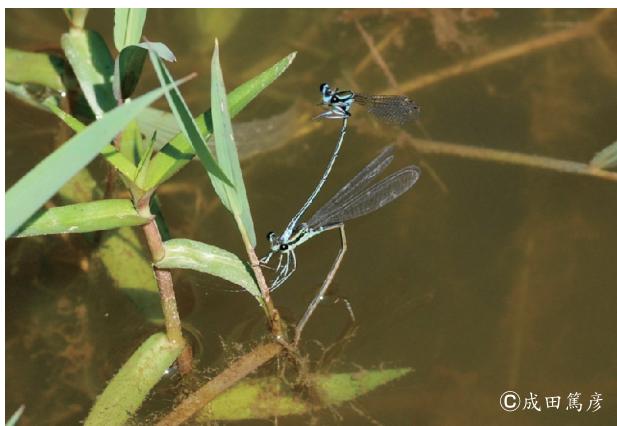
文・写真／成田篤彦



©成田篤彦

ヒシの葉上で交尾するオオイトンボ イトトンボ科

腹長23~27mm。5~9月に出現。ヤゴ（幼虫）は平地のハスやガマなどが生える浅い池などに棲む。千葉県指定一般保護生物



©成田篤彦

イボクサに産卵するモノサシトンボ モノサシトンボ科

腹長35~38mm。腹に物差しのように等間隔で青白い模様がある。ヤゴは水生植物が繁茂した木陰の多い池に棲む。5~9月に出現。雄と雌が連結して植物組織内に産卵する。千葉県指定要保護生物=2009年9月中旬 市原市（写真、上下共に筆者撮影）

子供の頃、夏休みの宿題に昆虫採集があった。しかし、捕虫網などとても手に入らなかつた。だから、手ぢかにある目の粗い布で網を縫いそれに針金を通し、棒をしつかりつけて捕虫網を作つた。三角紙はパラフィン紙を自分で長方形に切つて折つた。三角紙を入れる携帯用の箱はお菓子の箱の薄い板を利用して作つた。だが、虫メガネと昆虫針と展翅板とピンセツトは買つてもらつた。

当時はいい図鑑も手に入らなかつたし、トンボの標本はチョウなどと違つて、三角紙に入れておくとあれほど鮮やかであつた青や黄色の色が褪せてしまい汚らしい色となる。そのため、小型のイトトンボ類は図鑑で調べても同定（種名を確定すること）するのは難しかつた。

さて、今年の晩夏、アシが生える小さな堰を訪れた。シイやカシやコ

位の鮮やかなスカイブルーのイトトンボが、太鼓橋のようなアーチを描いて止まつていた。「あ！ 交尾している」。右が雄、左が雌。雄が雌の首をはさんでいる。そして、雌が白い腹を伸ばし、雄の胸の近くの腹につづけている。

「なぜ、こんな姿で交尾するのか」。

昔、中学校の先生がトンボの交尾の仕方は他の昆虫と違つて複雑だと説明してくれたが、その時ははつきりわからなかつた。そこで、石田昇三著1969（『原色日本昆虫生態図鑑（II）』保育社）を開いて、調べてみると「イトトンボの場合には、雄

が尾部付属器で雌の前胸部を把持し連接してから、第2、3腹節の副性器（交尾器）を第9腹節にある生殖口にあてがつて精子を交尾器に移し、その後に、雌が腹部を曲げて、生殖門を雄の交尾器に接着させ、雄と雌が環状となつて受精を行う」と書かれてあつた。要するにトンボの雌は他の昆虫と同じように生殖器と交尾器が共に尾の先端にあるが、雄は生殖器（尾の先端）と交尾器（胸近くの腹の位置）が離れた別の場所にあるから、雄は雌を捕まえ連結すると精子を交尾器に移し、雌が尾の先端にある生殖器を雄の交尾器に合わせるからこんな格好の交尾になるのか

「ときには、肝心の種名は何だろうか？」新井裕著2004（『トンボ入門』どうぶつ社）によれば、イトトンボ類の見分け方は難しく、それ

ぞれの頭部や胸部の斑紋（はんもん）で見分けるが、詳しくは複眼の後ろの眼後紋（がんこうもん）で区別する。オオイトトンボは眼後紋がコンマ型でやや大という。また、この紋が内側に突き出した波形なのはモノサシトンボだという。野外では区別がつかなかつたが、それによると最初に交尾していたイトトンボはオオイトトンボであった。また、オオイトトンボは千葉県指定の一般保護生物、モノサシトンボは要保護生物で両種ともかずさ全域に生息していると思われるが、正確なことはわからない。いずれにせよ、最近、上総でも減少が著しいから、彼らの生息地である樹陰の多い水草の茂った池沼をできるだけ残しておきたるものである。

ナラの枝が堰の上空を半分覆つていった。アシが生えていない水面にはヒシが繁茂していた。その葉上に3cm

と、連結したトンボがアシの生える

場所の草の葉に止まつていた。

雄が雌の胸の先端を尾の先ではさみ、長い腹をしならせながら立つて

いる。「少しほつそりしているし、連結の姿勢が違う」と思った。しか

し、ヒシの葉に止まつていたイトトンボとよく似ている。そのうち、連結しながら飛び立ち、雌が産卵管を

水面下の植物の茎に差し込んだ。

それにしても人が全くいない。風もない。空は真っ青。ヒシの葉と水面の深緑色に、イトトンボたちのスカイブルーの色彩が12月の誕生石のトルコ石のようにならついていた。

「とにかく飛び立ち、雌が産卵管を

水面下の植物の茎に差し込んだ。

それにしても人が全くない。風

もない。空は真っ青。ヒシの葉と水

面の深緑色に、イトトンボたちのスカイブルーの色彩が12月の誕生石の

トルコ石のようにならついていた。

「とにかく飛び立ち、雌が産卵管を

水面下の植物の茎に差し込んだ。

それにしても人が全くない。風

もない。空は真っ青。ヒシの葉と水

面の深緑色に、イトトンボたちのスカイブルーの色彩が12月の誕生石の

トルコ石のようにならついていた。

「とにかく飛び立ち、雌が産卵管を

水面下の植物の茎に差し込んだ。

それにしても人が全くない。風

はない。空は真っ青。ヒシの葉と水

面の深緑色に、イトトンボたちのスカイブルーの色彩が12月の誕生石の

トルコ石のようにならついていた。

（参考文献）

○千葉県レッドリスト
(動物編) 2006年
改訂版